

独伊海軍の印度洋作戦

連合国を相手に海上交通破壊戦を展開するドイツ海軍は、大西洋方面の対潜能力が強化された一九四二年夏以降、その舞台をインド洋に移した。イタリア海軍もこれに呼応するが……。

文・平間洋一

ドイツ潜水艦の展開

連合国がエニグマ暗号を解読して対潜戦術や対潜武器の性能を向上させ、大西洋におけるUボートの被害が増大し始めた一九四二年(昭和一七)八月下旬、ドイツ海軍は、北極圏グループ^{*}と命名された六隻の攻撃潜水艦をケープタウン沖に送った。

初めてインド洋に進出したU五〇四号が貨物船三隻を沈める戦果をあげ、また占領下のフランス・ロリアンを訪問した日本海軍の伊三十三号潜水艦からインド洋方面の対潜警戒が手薄であることを聞く^{*}と、ドイツ海軍は一〇月に三隻のUボートをさらにインド洋に追加。連合国の商船三隻を撃沈、一隻を撃破した。続いて二月から翌四三年二月上旬にかけて、海豹グループ^{*}の六隻を派遣する。

対潜警戒が強化された結果、このときは先のグループに比べて戦

果は減少(撃沈一九隻、撃破二隻)したが、これがドイツ海軍最初の本格的なインド洋への潜水艦の展開となった。

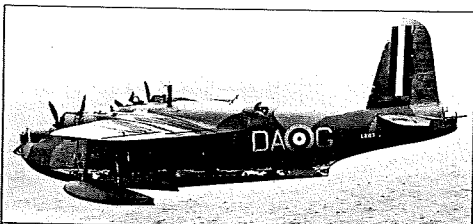
カール・デーニッツ提督は作戦効率と戦略物資の確保という観点から、これら潜水艦をインド洋で作戦に従事させた後に、帰路アジアからの戦略物資を搭載して帰国させることとし、一九四三年三月ペナンに潜水艦基地を設けてパタゴニアに物資搭載基地、スラバヤとシンガポールに修理および物資搭載基地、神戸には修理基地を開設した。同年五月上旬、海豹グループと交替するために六隻のUボートがインド洋に向かい、これらの潜水艦はインド洋において三隻、大西洋で二隻を撃沈、一隻を撃破する戦果をあげた。損害はマダガスカル島沖で撃沈された一隻だけである。

一九四三年四月から五月にかけて大西洋でUボート五四隻を失っ

たドイツ海軍は、こうして連合国の警戒の薄いインド洋を重視するようになる。六月には、第一モンスーン・グループの二三隻(二隻は捕虜用)がインド洋に派遣された。しかし、連合国の対潜警戒活動の組織化、特に暗号解読などによって被害が急激に増大し、インド洋に入れたのは五隻にすぎない。その一方、戦果も撃沈六隻、撃破一隻に減少した。

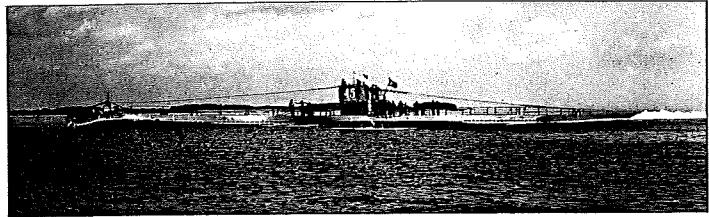
このグループがペナンに入港しつつあるとき、さらに四隻を追加したが大西洋で三隻を喪失して、結局ペナンに着いたのは一隻にすぎなかった。

翌一九四四年一月上旬、第一グループの三隻が物資を満載してペナンを出航し、帰途についた。しかし、暗号を解読したイギリス海軍に給油艦フラーゲを撃沈されてしまう。このため、ヨーロッパに帰れたのは燃料補給に成功したU一八八号一隻のみで、ほかの二隻



大西洋方面での連合国側対潜能力の強化は、Uボートの活動を制限するようになった。写真は英空軍のサンダーランド哨戒飛行艇。

^{*}エニグマ=第二次大戦中、ドイツが使用した暗号機。ドイツはエニグマに絶対的信頼を置いていたが、連合軍はこれを解読していた。



艦橋の旗竿にドイツ軍艦旗を掲げ、出撃するU45潜水艦。大西洋方面でのUボート対策の強化は、海上交通破壊作戦の舞台をインド洋に向けさせる結果を生んだ。

は再びペナンに向かわねばならなかった。

イタリア海軍の参入

日独とともに、同じく枢軸側のイタリアもペナンに潜水艦の支援基地を開設し、インド洋作戦に参入しようとする。ところがイタリアの潜水艦はドイツのUボートに比べて旧式かつ大型であり、作戦効率が悪い。そこでドイツが最新のVII C型Uボート九隻をイタリアに譲渡する代わりに、イタリアが九隻の旧式潜水艦を輸送用に改造すること交渉が成立した。

イタリアはこの協定に従って、一九四三年四月末から七月末にかけて改造工事を行ない、あわせて工作艦一隻と海防艦エリトリア開戦と同時に神戸へ脱出していたペナンに配備した。

イタリア海軍の輸送潜水艦の第一陣三隻は五月にポルドーを出航し、カペリーニは七月一〇日、ジュリアーニは八月一日にそれぞれシンガポールへ到着した。しかし、もう一隻のタツォーリは途中で撃沈された。次いで第二陣の二隻がヴェルテイを出航し、うち一隻は八月二六日にスマトラ北方のサバ

ンに到着したがもう一隻は撃沈され、極東には結局三隻のみが到着した。

また、一九四二年に就役した一七〇三トンの大型攻撃潜水艦カーニはインド洋における連合国船の攻撃を目的に、一九四三年六月五日にヴェルテイを出航。ケープタウン南方で、イギリスの補助巡洋艦アストリアスに魚雷一本を命中させたあと八月二八日インド洋に入った。しかし、本国からの休戦電報を受信したカーニ艦長はペナンからの指示を無視して英領ダーバン港に向かう。そして九月二〇日、イギリス軍に降服した。

衰退期の作戦

一九四四年六月六日、連合国が北フランスに上陸すると、極東へ派遣した潜水艦に対する補給は途絶えがちになり、魚雷や燃料の不足が深刻化する。修理や整備作業も困難になっていった。さらに、一九四四年一〇月には、ペナンに機雷が敷設されたことで、潜水艦基地をスラバヤへ移さねばならなくなつた。

当時、ドイツは二五隻のUボートを極東へ送ろうとして大西洋で

一四隻、インド洋で五隻を失っており、先に展開した潜水艦とあわせて極東には一隻が展開していた。一九四四年秋に入ると、一隻が物資輸送のため本国への帰投を命ぜられたが、一〇月には三隻がオーストラリア周辺の哨戒に向かつて二隻を喪失する。結局、U八六二のみが二隻撃沈、一隻に被害を与えたのみ帰投した。

ドイツの敗北が迫った一九四五年初頭、行動可能なUボートに帰投命令が出された三隻が本国へ向かった。そのうち、帰投できたのは一隻のみで、二隻はドイツの降服にもない途中で連合国に降服した。

一方、極東に残ったU一八三は四月二日、日本軍の作戦に協力してアメリカ海軍の進撃を阻止するため、フィリピン沖に向けスラバヤを出航した。しかし、日の丸を司令塔に描き、大きな軍艦旗を掲げてジャワ海を水上航行中のアメリカ潜水艦から雷撃を受け、撃沈された。これがドイツ潜水艦の太平洋への最初の出撃であり、また極東におけるドイツ海軍最後の出撃でもあった。

(ひらまよういち、防衛大学校教授)